

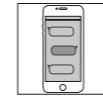
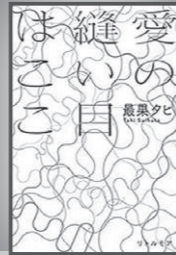
鱗祭

第三弾

拡大版
目から鱗

編集部員のお気に入りの本を紹介する「鱗祭」も今年で3年目になります。本棚から本を1冊手に取り、秋の柔らかな日差しのなかでページをめくってみてはいかがでしょうか。

「コミュ障」の社会学



雄三 おすすめの本

「コミュ障」の社会学

著 貴戸理恵

2010年頃からインターネット上で広まり、今やネットスラングとして定着した、コミュニケーション障害の略である「コミュ障」。この言葉を日頃使っている方も多いであろう。しかし、その言葉の本質を理解している人は少ないのではないだろうか。本書は「コミュ障」の治し方を述べたものではなく、まず「コミュ障」を分析し、そこから派生して不登校や生きづらさの歴史に言及するものである。

「コミュ障」は今の時代に広まった言葉だが、コミュニケーションが苦手な人たちが急に現れたわけではない。「生きづらさ」や「不登校」といった形で彼らはすでに存在していたと言えるだろう。そしてこれらの問題は戦後から現代にかけて苦難の歴史をたどってきている。1950年代末から公に報告されるようになった不登校であるが、当時の一般的認識で

「コミュ障」の社会学

記事執筆者のコメント

本書はさまざまな視点や意見をもとに書かれており、読み終えた後には、必ず「コミュ障」や「不登校」について深く考えさせられると思います。

は不登校は病理・逸脱であるとされていた。そして1980年代半ばになってやっと、不登校を否定的に捉える考えに異議を唱える運動が展開されるようになった。当事者だけでなく支援者もまた、この問題に対して真っ向から立ち向かってきた。それでもなお、不登校やその原因の一つでもある生きづらさの問題については解決されていない。一体そこにはどのような背景や理由があるのか。また、当事者や支援者はどのように感じているのか。

不登校者の生の声、そして彼らのその後の歩みから見えてくる戦後日本の社会には、誰もが直面しうる闇が存在する。だからこそ、コミュニケーション至上主義とも呼ばれる現代においても、「コミュ障」の歴史を理解し、正確な認識を持つことは、意義のあることに違いない。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



シン おすすめの本

家族八景

著 筒井康隆



記事執筆者のコメント

この小説では、主人公のテレパシー能力が独特の方法で表現されています。普段とは違う読書体験に、脳が直接刺激されるような快感が味わえます。

テレパス。それはテレパシーを用いて、他人の感情や思考、いわば彼らの内面をよむことができる超能力者。もし京大にそんな人間がいるとしたら、学生達の奇抜な思考に圧倒され、きっと気が滅入ってしまうだろう。テレパスは、京大では生きていけないはずだ。いや、そもそもテレパスが心を休めて定住できる場所なんて、現代社会にはないのかもしれない。多くの現代人は、他人には見せられない内面を心に秘めているのだから。

この物語の主人公、^{ひたななせ}火田七瀬は、そんなテレパスの女性である。七瀬は、他人の刹那的な感情だけではなく、思考の整え方や深層心理までもよめてしまう。彼女は新米の家政婦として、多くの家を転々としていく。そこで出会う人間たちの内面は、彼らの性格や知的レベルを反映し、まさに人それぞれ

れだ。整った思考回路を持つ聡明な女性。不可思議な深層心理を抱く芸術家。葬式中に衝撃的な心中が漏れ出す老人……。

この物語では、人それぞれの内面を七瀬がどうよんでいるのか、七瀬がそれをどのように感じるのかが、緻密に書き表されている。七瀬はテレパス故の苦しみに耐えながら、時には出会った人間たちを助け、時には見捨てて生きていく。七瀬が自身の内面をよむことはないが、我々読者は文章から七瀬の感情を読解することができる。それでも、七瀬の行動は時に読者を戸惑わせる。テレパスは、普通の人間が予想するような生き方では、自らを守れないのだ。もっとも、それがこの物語の面白いところではあるが。読書に熱中するうちに、気づけばあなたも、七瀬の深層心理をよみたくなっているかもしれない。

はみだし
すてーじ

NF でライブします見に来てね
⇒最前列で応援します気づいてね

(工・1 貴乃鼻)
(素敵なペンネームですね。Pヒビヒ。；編)

はみだし
すてーじ

クロスワード、当選目指して頑張ります。
⇒投稿、お待ちしています！ ちなみに、来月の特集は35×35クロスワードです。

(工・1 ティーブレイク)
(あなたの根性が試されますよ；編)



びっら のおすすめの本

愛の縫い目はここ

著 最果タヒ



記事執筆者のコメント

『愛の縫い目はここ』という表題の意味はあとがきまで読んでようやくわかります。美しい本なのでぜひ、あとがきまで味わい尽くしていただきたいです。

「君、いつも何読んでんの？ それ」と本を指されたとき、「これ？ 詩集だよ。いつも鞆に入れてるんだ」とは打ち明けにくい。好きな詩を他人に教えるのには、勇気が必要だ。詩の言葉が染み入るのは、心の内でも最もプライベートで繊細な部分だから。

今回紹介する現代詩集『愛の縫い目はここ』もまた、とりわけプライベートな詩体験を与えてくれる。詩の言葉の連なりは難解だが、透き通った柔らかな語感に惹かれて繰り返し読むうちに、いくつかのフレーズが、心の奥底に深く沈み込んでゆく。そしてある瞬間に、ふっと浮かび上がってくるのだ。

忘れてしまったものでさえばくの体を作るならば、燃やされても、だれの記憶にも残らなくても、生きた、と言える気がしていた。（「BABY TIME」より）

外向性が重視される現代、心の弱さは恥ずべきものとされている。心の最もプライベートで繊細な部分に一人向き合うこともあまりない。だが、自らの心にじっと向き合い、悩みや苦しみを全うする人生が、美しくないはずはないのだ。心に深く沈み込んだ詩の言葉と共に、時に孤独に生きること。言葉の糸で、傷口を縫い合わせてみる。愛の縫い目はそこにあるのかもしれない。

最後に、この一節を引いておく。

それから貝のように硬くとじる。永遠が始まる。きみがまばたきのように、毎日一瞬だけ愛したものと共に。（「真珠の詩」より）



山頭火 のおすすめの本

姑獲鳥の夏

著 京極夏彦



記事執筆者のコメント

京極夏彦先生の処女作。とても新人作家とは思えない文章の巧みに当時の編集者も驚いたそうだ。メフィスト賞設立に大きく影響した作品でもある。

ある人が何か不思議な体験をしたとしよう。彼は周りにそのことを話すが、誰も話を信じない。多くの場合、それは妄想と見なされる。しかしそれが他人に理解され、多くの人に認知されるとそれはやがて伝説や妖怪といったものになる。他者に理解されるものはそれなりの理由がある、その不思議な出来事と現実を繋ぐ理由が——。主人公関口巽は久遠寺家の闇に関わることで、昭和の時代に妖怪「姑獲鳥」の誕生、そしてその成り立ちを目撃することとなる。

「20箇月もの間子供を身籠もっていることができると思うかい？」

関口は陰陽師である友人中禅寺秋彦（京極）に対して、こう切り出した。それに対し京極は姑獲鳥——お産で亡くなった女性の無念を表す妖怪——を挙げる。その後、関口は件の

20ヵ月妊娠している女性の姉である久遠寺涼子に会い、久遠寺家に向かう。関口が久遠寺家の様子を一通り見た後、涼子は消え入りそうな声で言った。

「私を——たすけてください」

関口は不思議と彼女に惹きつけられ、事件に関わっていく。まるでずっと前から何かに取り憑かれていたかのよう。

本作ではいわゆる「妖怪」は登場しない。しかし、関口の中で京極から聞いた姑獲鳥と、子を求めて苦しむ女性の姿が結びついた時、彼の中で妖怪「姑獲鳥」は誕生したといえるのではないだろうか。妊娠、出産に関する不幸は現在でも多い。おそらく人という種が存在する限りなくなることはないだろう。現代に生きる我々も何かの拍子に姑獲鳥を見出すことがあるはずだ。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



ふえい のおすすめの本

82年生まれ、キム・ジョン

著 チョ・ナムジュ

訳 斎藤真理子



記事執筆者のコメント

韓国で異例の大ベストセラーとなり、議論を巻き起こしました。何を思うかは人それぞれでしょうが、読後に感じたことを大切にしたい作品です。

自分の祖母の、母の人生を考えたことはあるだろうか。女の子として生まれ、育てられ、夢を持ったりそれに敗れたりしてきた、一人の女性の人生として。それを考えるきっかけをくれるのが、今回紹介する『82年生まれ、キム・ジョン』だ。

本作は、主人公キム・ジョン氏の主治医による記録という形を取ってつづられる。キム・ジョン氏は33歳、ソウルで夫と娘と暮らす、韓国の平均的な専業主婦だ。大学を出て、就職し結婚、出産後に離職。ありふれた人生を歩み、平凡だが幸せな生活を手に入れているように見える。しかしある日、彼女に異変が起こる。母親、学生時代の友人など身の回りの女性の人格が次々と彼女に憑依するのだ。主治医とのカウンセリングを通して見えてきたのは、彼女が人生で出会ってきた、女性であるがゆえの困難の記憶たち。進学で、就職で、

結婚後の生活で、彼女が味わってきたのは、いわば「当たり前」として女性が甘受しなければならなかった苦しみだった。恐ろしいのは、その一つ一つが決して特別ではないことだ。それに近い女性への扱いを見たこと、あるいは経験したことがある人は、現在の日本でも少なくないどころか、ほとんど全員だと思われるのだ。

私たちの祖母や母、その他近い女性に話を戻そう。彼女たちの人生にもきっと、女性であるという理由だけで不利益を被った経験があっただろう。それを語ろうとしなくても。彼女たちはキム・ジョン氏であり、キム・ジョン氏はどこにでもいる。本作の結末は絶望に彩られているが、これから生きていく私たちならばきっと、自分自身の、自分の子の明日を明るくすることはできるはずだ。



青橋 のおすすめの本

こちら救命センター

著 浜辺祐一



記事執筆者のコメント

医学部の方だけでなく、一般の方にも読んでもらいたい作品です。同筆者のエッセイ集は他にも発刊されているので、興味を持った方はそちらもぜひどうぞ。

がんセンターと救命救急センター。どちらも読者の方々の多くは行ったことがなく、できれば生涯行かずに済むことを祈っている場所である。そんな縁遠い場所で働く医師たちの日々を知っている方はあまりいないだろう。『こちら救命センター』は、そこで働いている医師によるエッセイ集である。

この本は、筆者ががんセンターや救命救急センターで勤務しているときに看護師向けの月刊誌で連載していた文章を1冊にまとめたものだ。看護師向けの冊子に掲載されていたとはいっても、読むのに医学の知識を必要とするわけではない。筆者が医師としての仕事で実際に出会った患者や同僚たちとの関わりの描写を通して、読者に自らの思いを伝えていく。その文章からは、医師も人間であるという当たり前だが忘れがちなことが伝わってくる。身勝手な患者を叱ったり、悩む

看護師の相談に乗ったり……シチュエーションこそ特殊であれ、病院にいる人々の振る舞いは我々のよく知るそれと同じものである。また、ともすればやや乱暴にも感じられる、筆者特有の話し言葉に近い文体が「医師側からみた病院」という読者がなかなか体感しないであろう世界をありのままに伝え、臨場感を持たせる。

この本から伝わってくるのは、読者の方々になじみのない場所であっても、よく知る日常に近いことが起こっている、ということである。

病院というところは、どんなに異常な世界に映っても、われわれ人間にとって、決して日常からかけ離れた別世界ではないのである。

はみだし
すてーじ

友人の恋愛関係がどろ沼で困っています…。どうしたらいいのでしょうか？
⇒あなたもどろ沼に参加してみたいか？

(工・2 93kg)
(まさか……すでに!;編)

はみだし
すてーじ

古池や 鐘が鳴るなり お馬が通る
⇒混ぜすぎ注意

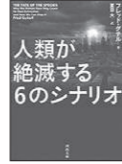
(理・4 イカ息子)
(季語もないじゃん;編)



一沫 のおすすめの本

人類が絶滅する6のシナリオ

著 フレッド・グテル
訳 夏目大



記事執筆者のコメント

気候変動による大量絶滅からコンピューターの暴走まで、現在の我々はさまざまな危険と隣り合わせで生きていることにお気づきでしょうか。

「明日があるさ」と思っている方は多いのではないだろうか。多くの人はどんなに自分が苦しいときでも、明日を信じていればきっと物事が好転していくだろうと考えている。だが、明日という未来があると妄信してしまって本当に良いのだろうか。いつでも明日が来るはずだという幻想は突然崩れてしまうかもしれない、ということを書き教えてくれる。

ティッピングポイント——均衡が崩れ、元に戻れなくなるギリギリの場所——という単語を筆者は幾度も用いている。たとえば、現在の地球は、気温、二酸化炭素濃度、海水面など、さまざまな自然要因の均衡が保たれることで成り立っている。これらがティッピングポイントを超えてしまうと、気温の上昇幅は次第に大きくなり、地球温暖化が進み、北極・南極の氷が融けて海水面は上がり続けてしまうかもしれない。

6500万年前に恐竜が絶滅したのも、24億年前に嫌気性バクテリアの繁栄が突然終わりを告げたのも、隕石や藻類の影響で気候が変化し、ティッピングポイントを超えてしまったことが原因だったと考えられている。そして今、地球環境をティッピングポイントに向けて少しずつ動かし続けているのは、我々人間なのだ。

本書で描かれるシナリオは、どれも最悪の事態が起こった場合のものだ。そこまで悲観的になる必要があるのかと疑問を持つ方もいるかもしれない。しかし本書を読めば、筆者が導き出した未来のすべてが、現実の延長線上で起こり得ると思えてくるはずだ。筆者の予想が現実になる前に、我々にできることはないだろうか。本書を読んで今一度考えてみてほしい。



小市民 のおすすめの本

児玉まりあ文学集成

著 三島芳治



記事執筆者のコメント

言葉や表現に対して抱いていた固定観念が解体されていく作品です。ラブコメという漫画表現にこんなことができるのか、という新鮮な驚きを与えられます。

ものと言葉には不思議な関係がある。ものがあるから言葉があるのか、言葉があるからものがあるのか。この問いは認識や存在、あるいは宗教の問題と絡みあいながら文学の世界で幾度も繰り返されてきた。この循環した問いかけに対して、ラブコメのフォーマットを用いて挑んだ作品が今回紹介する漫画『児玉まりあ文学集成』である。

舞台は、まるで白紙のように個性が排された高校の文芸部。文芸部部长、児玉まりあは、入部を希望する男子高校生、笛田君に対して、入部試験を行う。その内容は「文学的」だ。児玉まりあという人間の形容による比喩の練習、二人きりでのしりとりによる語彙の鍛錬、名前を呼び続けることによる新たな文章記号の発明。「文学的」な会話によって白黒の世界は不思議な色合いを帯びていく。

不思議な色合いを背景に浮かびあがる二人の感情は誰にとっても身近なものだ。きれいな言葉で形容してほしい、会話をずっと続けていたい、相手に名前を呼ばれたい、相手の名前を呼び続けたい。言葉によって感情が生まれ、生まれた感情からまた言葉を生み出す。言葉とものとの不思議な循環、身近にあるけれど意識はしない関係が、二人の日常を彩っていく。「文学的」な言葉によって二人のあいまいな距離感がつづられていく。

音だけでなく、意味だけでなく、形だけでもない言葉。言葉は世界の中に満ちて、不思議な力を生み出している。言葉によって生み出される不思議な力で形づくられた「文学的」な二人の関係を描いた本作は、言葉にしてもとらえきれない不思議な輝きを放っている。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

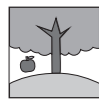
UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



待ノ介 のおすすめの本

感じる科学

著 さくら剛



記事執筆者のコメント

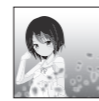
科学における各分野の一番面白いところをわかりやすく伝えることを目標に書かれた一冊です。少しでも興味がある人は、ぜひ読んでみてください。

科学は長い年月をかけて発展してきたものである。その上、普通の人は思いつかないような革新的なアイデアや高度な数学的考察などによって進歩してきた。そのため、科学的な現象にちょっと興味を持って専門書を手にとってみたが、いきなり難解な概念や数式が現れてさっぱりわからなかったという人は多いだろう。しかし、この本は軽い冗談まじりの例え話を使って、その複雑で難解な現象の面白い部分だけを取り出して説明してくれる。

厳密に理解するには、わかりづらい考え方や数学的手法を使う必要があるが、少し興味を持った人が気軽に読んでみる場合にはこの本がぴったりである。この本で用いられている例え話はとてもわかりやすいものである一方で、解説しようとする事柄の本質をしっかりと押さえている。たとえば、量

子論において重要な観測者と素粒子との関係性を、飼い主とイヌの関係性に対応させて置き換えている。ペットのイヌという例えによって、ミクロな世界で起きている抽象的な現象がより身近なものとして捉えられて、説明もすんなりと受け入れることができる。さらに、現象の主旨からずれることなく、重要な関係性を変えずに説明している。このような巧みな例え話によって、読者はクスクスと笑いながら本質を理解する事ができる。

筆者も述べているようにこの本はさまざまな分野の大枠を紹介したに過ぎず、これ一冊で完璧に理解できるというわけではない。しかし、この本を読み終わった後にはきっと科学に興味を持ち、その先のより深い理解を身に付けたいと思っ



日和 のおすすめの本

今夜、きみの声が聴こえる

著 いぬじゅん



記事執筆者のコメント

すっきりとした青春小説です。普段このような小説を読まない人も、たまに読んでみるとどこか懐かしく甘酸っぱい気持ちになれると思います。

大学生の生活はさまざまだ。平坦で起伏のない生活を送る人も少なくないだろう。毎週同じ授業を受け、同じようにサークルに行き、バイトに行き、休日は家で寝る——そんな無機質で灰色な学生生活を送っていないだろうか？『今夜、きみの声が聴こえる』は、そんな学生生活にわずかながらも彩りを与えてくれる作品だ。

高校2年生の高橋茉莉果はいつも平均点ばかり、「まんなかまなか」としてからかわれ、ずっと自信が持てずにいた。意中の幼馴染、鬼塚公志に恋人ができたことを知ってしまい失意に沈むが、数日後追い打ちをかけるように公志は交通事故で亡くなってしまふ。悲しみに暮れ学校にも通えずにいた茉莉果は、祖母からももらった不思議なラジオから公志の声を聴く。「探し物を手伝ってほしい」と言って茉莉果の前に

姿を現す公志。「探し物」の手がかりを見つけていくにつれ、一緒にいられる時間は短くなり、残酷でありながらも感動的な真実が明らかになっていく——。

本作の特長は、その読みやすさと感動的な結末だ。主人公の心情が鮮明かつわかりやすく描写され、吸い込まれるように感情移入してしまう。そして、結末ですべての要素が繋がったとき、心が動かされることだろう。

もし自分が無感動で単調な生活を送っていると思うのであれば、ぜひこの本を開いてほしい。きっと灰色だった世界が鮮やかな色で彩られるはずだ。

——もう、泣かないよ。公志のいない毎日を、
私は生きていくから。——

はみだし
すてーじ

ボードゲーム…いいよね…
⇒僕も夜に集まってやったりします

(工・院 きい)

(そして気がいたら朝を迎えたりしていますよね；編)

はみだし
すてーじ

はみだす先には何がある？
⇒あの時僕たちが決定的に変えてしまった世界の形

(文・4 香深)

(僕にできることはもうないです；編)